

第2回岐阜県都市公園活性化懇談会 議事要旨

日時：平成28年4月21日（木）10時30分～11時30分
場所：岐阜県庁 4階 特別会議室

1 開会

○座長

- ・第1回の懇談会の委員の先生方それぞれのお立場から県営公園全般に関する様々なご意見をもとに、岐阜県都市公園活性化基本戦略（骨子案）を事務局でとりまとめた。

2 事務局説明

○県

- ・資料に基づき説明

3 意見交換

○座長

- ・事務局からは、3つのテーマと6つの理念による県土の将来像に貢献するという一つの戦略の中で、公園から始まる清流の国ぎふ回廊づくり、というテーマが定められ、それを3段階のステップで具体的な戦略として展開するという総括的な戦略案が示された。さらには、養老公園、世界淡水魚園、平成記念公園、あるいはそれを総合した清流の国ぎふ回廊づくりに向けた総合的な取組みという議論をしていくことになる。

○委員

- ・国では、これからの都市公園を含めた緑、公園緑地のあり方というのを、ここ2年くらいかけて検討会を進めている。緑、ストックを最大限に活かす、緑によるリノベーションなどを考えていこう、というのがひとつ。官民の連携を強化していこうということが2つ目。3つ目は、都市公園に関して、ストックをもっと使いこなしていくということを考えている。

○委員

- ・全体としてはよくまとまっているが、総論で見ると結構いろんなことが全部当てはまってしまうため、各論にする際に、この公園は全部満たさなければいけないのか、それともこのうちのどれかを絞るのか、ということそれぞれの公園の議論の時に整理をしていくとよいのでは。全部満たそうとするとどの公園も出口が同じになってしまい、結局魅力がなくなることに陥りやすい。

○座長

- ・今まで都市公園というと、外に出るよりは内側でどうするのか、という議論が多かった。あわせて、立地している地域と県営公園とのかかわりについても、戦略的にいろいろあったとしても、強い意識の中でそういう公園像を作るということではなかった。
- ・公園の量的拡大をし、均一に整備して管理していこうとすると予算が相当かかる。それを公園管理者だけが内側に向いてやろうとすると、マネジメントではなくメンテナンスに重心が置かれる。利活用、どう活性化させていくかというマネジメントの側に重心が置かれないうまま推移してきてしまった。そうすると県民なり市民なり魅力が薄れていくからますます利用者が少なくなる。こういう負のスパイラルを逆転させていこうというのが、今、国土交通省が考えているひとつの戦略。

○知事

- ・総論としては非常に上手に、きれいにまとまっている。花フェスタとか各論を議論していく中で、も

う一度総論に戻り、総論のメリハリはどうするのか、という話にいくと思う。花フェスタの問題点を率直に言っていただきながら、また総論に返すようにしたい。

○委員

- ・グローバルズムとあり、世界に誇るバラ園と資料にあるが、花フェスタ記念公園のバラ園が世界的にどのくらいのレベルにあるか、ということをはっきり書く必要がある。
- ・世界何本の指に入るかぐらいの内容と本数と種類と。日本ではたぶん一番。それがないとそれをどうやって日本国内だけでなく世界に示していくのか。正しく位置づけして伸ばすことをやっていくことがこの公園はまずそこからスタート。

○委員

- ・コレクションの数では世界で1位ではなくなった。世界最大のコレクションを持っているところは、現在8千を超えており、それを追いかけるのに意味はない。
- ・写真のスポットになるようなところがあまりなく、メリハリがない。

○委員

- ・バラ公園というわりには、バラそのものに対する要望はほとんどなく、年間を通して利用したい、という声が多い。
- ・地元としては、中核的な観光交流拠点となるので、こういう議論をしながら連携して、何を一緒にやって、それを順番にどう返していくのか、ということを決めていきたい。

○座長

- ・バラにこだわるのか、バラ以外についても、二季性を四季性に変えていくために平均化していくのか。この両立をどうするのが重要。
- ・今日の提案の中にあっただのが「バラ科の植物」。桜もすべてバラ科。バラ科の植物というところで広げていければ、そうした可能性を模索できるのではないかという意見が一つある。
- ・ワシントン州のポートランドは、バラの町で、全米としてもっとも企業進出したい、住みたい町と言われている。インテルやナイキなど様々な企業が進出している。彼らが言っているのは、バラに象徴されるポートランドの環境政策が、非常に自分たちの事業にとって魅力的であり、知的な創造をしながらものを作ることにジャストフィットしているから立地したいという話である。
- ・インターも近く、バラというものを具体的に、バラ科を含めたところに詰めていく。バラのイメージをどう地域に重ねていくのか。二重の戦略が必要。

○委員

- ・季節性、イベント性をもっと高めたほうがよい。
- ・最近提案しているのは、大晦日あけて1月までやったら、3月まで閉めてもいいのでは。日常使うところとイベント性のところを分けてしまった方が、インパクトが強くなるのでは。
- ・毎年楽しみに、違った景色が毎年生まれる、常に刺激を与える方法論を常にもつ必要がある。
- ・日常使うのは集約した方がよい。子どもの遊び、商業、飲食は使いやすく。
- ・年に二回バラまつりが行われて再オープンするなどの割り切り。

○委員

- ・バラまつりが終わり、7月、8月にバラ園に雑草が生えて見苦しい姿を見せている。その間はそこをクローズにしてしまい、見せないという手もある。それをやっているのが「なばなの里」。いろんなスポットがあり、たとえばチューリップが終わればそこを閉鎖して違うところへ移していく。

- ・3月にシンガポール植物園に行った。完全にオープンで入場料も要らないが、蘭のコーナーではお金をとる。そういう形をとるのも一つの方法かと。花フェスタ記念公園に入るときには安い入園料で、バラ園に入るときにまた料金をとる。そういうメリハリも考える必要があるのでは。

○座長

- ・国際園芸アカデミーの一部機能の園内での展開について、ベルサイユ園芸学校はベルサイユ宮殿の中にある。学生が常に学術的な意味でメンテナンスなどに参加している。

○委員

- ・公園の中に学校があるのがもっとも理想的と思う。
- ・イギリスのガーデンも中に園芸学校を持っていて、世界中から研究生を受け入れて、2年、3年コースで教育をしている。公園の園芸管理とうまく連携している理想的なやり方。

○委員

- ・バラというと女性、華やかさという点で盛り上がりが見られるのがうらやましいし、そこを高めると魅力が出るのではないか。
- ・美濃加茂市に来る方を公園に案内しようとすると、花フェスタ記念公園という名前だと「バラが世界一なんです」という説明がある。そこにもう一工夫あると、求心力が出てくるのではないか。

○座長

- ・国では、国営公園がイ号口号とある。最近イ号公園で花がたいへんな集客力を持っている。
- ・今のシーズンだと茨城県が国営公園のコマーシャルを流している。なぜかというネモフィラという花がものすごい観光客が来るから。一目千本というか一目瞭然に。それを見たいということで国際的にもあちらこちらから来ている。

○委員

- ・国営公園だと面積が非常にあるので、マスで見せるというやり方をやっている。
- ・「ひたち海浜公園」で210万人くらい。特に人気があるのはタイ。日本でいちばん行ってみたい場所が「ひたち海浜公園」になっている。青い花というのが珍しいということと、海と空とつながって青一色になるのが売り物だが、そのためにバンコクの地下鉄のラッピングにネモフィラを使っていたりする。県の観光サイドと一緒にやって成功している。

○委員

- ・花フェスタ記念公園は業界にとって魅力ある公園。あの公園を市民の遊び場にするのか、有名にするのかということ。
- ・あのバラ園のある公園は日本国の岐阜県にある、と言うような位置づけが必要。
- ・岐阜には宝がある、関ヶ原がある。これをいかに連携するか、これがキーワード。全部やろうとすると普通の公園となってしまう。特化することが世界一になる。決断が必要。

○委員

- ・海外にプロモーションしていくと、インパクトのある、しかもわかりやすい、しかもそれが本物であるという必要がある。
- ・インバウンドの場合アジア系と欧米系でニーズが少し違う。欧米系は滞在型で、意識を持って日本に来て、日本のすばらしさに感動して帰る。アジア系は通過型で、写真を撮ってお金を落としてぱっと帰る。その違いをプロモーションしていく。

- ・通過型と滞在型という観点で考えると、2泊ぐらいしてでもこの公園に通いたいと思わせる宿泊の仕組みとかが必要。
- ・国際園芸アカデミーが近くにあるということはポテンシャルにつながる。生徒との交流や、バラが咲いてないときのメンテナンスを一緒にやるなど滞在型にする仕掛けはあり、滞在型誘客につながる。

○座長

- ・可児の地域は卯花塙（うのはながき）を含めた日本の陶芸の世界の最先端を行っていた地域で、しかも文様は花。わかりやすい、というひとつの入口と、入ってみるとそれぞれに奥がある。
- ・あれだけの日本庭園と数寄屋がありながら、花と陶芸の結びつきが弱いのではないか。

○委員

- ・茶室と日本庭園は、場所は公園の中だが、バラとは切り離して、無理にくっつけない。お客さんが来ると陶器、茶道に目が行く。その後背地づくりが可児市の役割かと。
- ・荒川豊蔵さんの家を作り直して見てもらう、人間国宝の加藤孝造先生の窯が近くにある。美濃桃山陶の聖地とか、陶芸家のみなさんとか、そういうところで奥深さはいっぱい作れるし、可児市内の小中学校ではお茶を授業でやるようにしている。そういう市としての后背地を作っていく入り口として公園はすばらしい。メインはバラできちんと作り、陶芸文化の入口はあそこに置き、市に広がる。そういうのが我々の使命かと思う。陶芸文化は、多治見市、土岐市などともつながっていく。

○委員

- ・観光から見ると、通年型施設にしないと人がなかなか呼べないというのが一番の課題。バラにこだわればこだわるほど、春と秋に特化したシーズン限定の施設になってしまう。一年通して来ていただける施設にするには、いろいろなものを入れ込まないと通年型の施設にはならないのではないか。

○知事

- ・ひとつは、定番づくり。花フェスタ記念公園にはあれがある、とかスポットがあるというのはアイデンティティ、最大の見せ場。目に焼き付けるという話も言われたが、イベントであろうが花であろうが、なんであろうが、あそこはこういうところだ、という胸を張れるという、国内的にも国際的にも確たる定番、セールスポイントが必要。
- ・国際性ということは、追求の仕方がまったく足りない。世界の中で花フェスタ記念公園はどういう位置づけになるのか、どこをどうアピールしたら国際的な評価を受けるようになるのか。
- ・子どもという切り口も、ようやく緒に就いたところ。非常に急速にお客さんが増えているが、子どもという切り口は、岐阜のように緑や山が多い地域にとっては、いくらでもマーケットがあるのでは。
- ・いろんな政策と連携していくこと。なんでもやります、ということではない。今年は全国農業担い手サミットや全国レクリエーション大会もある。花き戦略、花の王国づくりという大きな戦略作りも進めている。いろんな政策があるなかで、舞台としての花フェスタ記念公園をどう活用していくのか。
- ・今ある花フェスタ記念公園と、戦略的に考えていくときに何が欠けているのかと。どういうスケジュールでどういうふうにならぬに企画を投入するなり施設を設けるなり設計を変えるなりネーミングを変えるなり、変えていく部分と今の部分をきちんと評価して位置づける部分があるのでは。
- ・次回までに大いに悩みながら、養老公園、世界淡水魚園、ほかの公園のありようと比較することでまた違ったアプローチの議論も出てくると思っているので、あまり性急に答えを急がないで、いろいろ考えていきたい。